

考古学からみた日本列島と朝鮮半島の交流

—古墳時代の西日本地域を中心に—

亀田 修一

1. はじめに

弥生時代以降の日本列島の生活・文化は、旧石器時代・縄文時代から続く「内」からの展開とともに、中国・朝鮮半島など「外」からの影響が混じりながら、形作られている。その「外」からの影響は1回のみではなく、何度も波状的にやってくるのである。それは「ヒト」そのものを含めてである。

その「外」からの代表的なものが水稻耕作技術であり、金属器などである。これらの源は中国にあるが、そのほとんどは直接的には朝鮮半島からもたらされている。

小稿は、日本列島の生活・文化に大きな影響をもたらした朝鮮半島との交流について、考古資料をもとに検討するものである。中国との関わりについては一部触れてみたい。

交流を語る場合、一般的に、その「モノ」や「文化」に注目されるが、「モノ」が「モノ」だけで来ることはなく、「文化」が単独で来ることはない。すべて「ヒト」を介して、その往き来の中で入ってくるのである。

そこで小稿では「ヒト」、特に「渡来人」を意識して検討する。対象時期は古墳時代であるが、一部その直前の邪馬台国時代から始め、奈良時代が始まる710年頃まで扱う。対象地域は西日本地域であるが、紙数の関係もあり、今回はおもに畿内（大和・河内中心）と吉備とし、一部九州をとりあげる。またこれらの地域においても当然網羅的に取りあげることはできないので、朝鮮半島と関わる代表的な遺跡・遺物を取りあげて検討する。

なお、朝鮮半島との関わりを示す資料の抽出方法、それらに関する検討方法は、以前亀田が提示した「考古学から見た渡来人」（1993）、「渡来人の考古学」（2003）による。

2. 邪馬台国時代の日本列島と朝鮮半島・中国

(1) 大和の朝鮮系考古資料

邪馬台国時代の資料として、大和ホケノ山古墳（弥生墳丘墓）の木槨とサルポ（鍬）を挙げておく（岡林・水野 2008）（図1）。

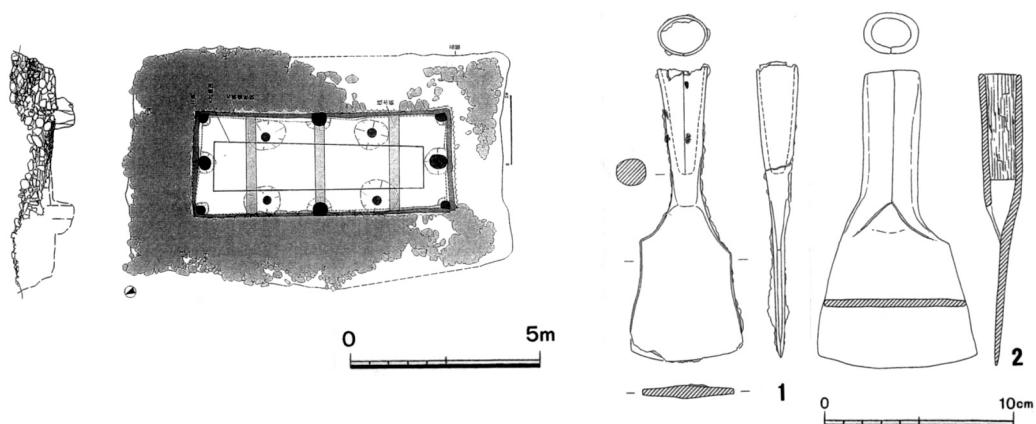


図1 大和ホケノ山古墳（墳丘墓）の木槨（1/200）・サルポ（鐘）と関連資料（1/4）
1：ホケノ山古墳、2：椿井大塚山古墳

ホケノ山古墳は出土資料の検討から3世紀前半～中葉頃と考えられている。当時の木槨は日本列島においては極めて珍しく、基本的に朝鮮半島との関わりの中で理解されるものである。ただ、ホケノ山古墳の木槨は「石囲い木槨」と呼ばれているように木槨の外側に石積みがあり、朝鮮半島の同時期のものと違いがある。報告書ではその前代に築かれた瀬戸内海沿岸地域の木槨から成立した可能性を考えている。ただこの瀬戸内海沿岸地域の木槨も基本的に朝鮮半島との関わりの中で理解されるものと考えられる。

次にサルポである。一般的に古墳時代、5世紀以降のものがよく知られているが、すでに山城椿井大塚山古墳でもサルポは出土しており、3世紀に朝鮮半島から持ち込まれた可能性が考えられる。ただ、これまで朝鮮半島においては3世紀に遡る同じような形の類例は知られていないようであり、今後の課題である（金在弘 1997・2007）。

(2) 『魏志』倭人伝にみえる対外交流

この時期の日本列島と中国との交流に関しては、いわゆる『魏志』倭人伝に見ることができる（内容については、佐伯 2000による）。

邪馬台国の女王卑弥呼が239（景初3）年、中国の魏に大夫難升米らを使いとして送る。まず朝鮮半島の帯方郡に行き、そこの役人に引率してもらって魏の王都洛陽に至ったようである。そのときの土産は男女の生口と班布であった。

魏の斉王は詔書を出し、卑弥呼を「親魏倭王」に任命し、「金印紫綬」を与える。使いの難升米らにも率善中郎将などの位を与え、銀印青綬を与えた。そして献上した品物の価値に相当するものとして、貴重な錦などの織物、金、五尺刀、銅鏡、真珠・鉛丹などを与えた。

そして卑弥呼が死んだのち混乱があり、壹（台）与という女子を立ておさめる。壹（台）与は掖邪狗らを帯方郡に派遣し、魏の朝廷で男女生口、白珠、青大句珠、異文雜錦などを献上した。

以上、簡単に『魏志』倭人伝の倭との交渉に関わる内容の一部を記したが、この中で卑弥呼をはじめとする当時の倭の王たちが中国に何を求め、期待していたかがある程度推測できると思う。

つまり、巨大な中国、魏の権威を背景に倭の国内を治めようとしていることである。モノとしてもらったものは、金印紫綬、銀印青綬、赤や青の上等の錦・毛織物などの織物、白絹、金、長さ五尺の刀、銅鏡、真朱(?)・鉛丹、黄幢などである。基本的にこれらは当時の倭にないような珍しいものと推測される。

一方、逆に倭からは、男女の生口や織物、布、弓と矢、真珠(?)、ヒスイの珠(?)などを献上している。当時の倭にとっては当然貴重な品物であったと推測される。

当時の邪馬台国を始めとする倭の国々が中国の魏などを意識していたことは間違いないと思われる。ただ先ほどの邪馬台国と魏の交渉のあり方を見ると、少なくとも現実には往来も含めて直接ではなく、帯方郡を介している点は重要である。当時の帯方郡は中国の出先機関であり、まさに「中国そのもの」であるかもしれないが、帯方郡は朝鮮半島の中部地域(黄海道智塔里土城?)に位置しており、いろいろな意味で、朝鮮半島との関わりを無視できないと筆者は考えている。そのような意味で倭の人々が期待した銅鏡の一つの候補である三角縁神獣鏡が帯方郡・楽浪郡およびその周辺域で作られた可能性がある(福永 2005、辻田 2007など)ということは、いま述べたこととも通じていると考えている。

邪馬台国から魏の都洛陽に至るには、おそらく壱岐・対馬から朝鮮半島南部の狗邪韓国に渡り、南海岸、西海岸と海岸づたいに北上し、黄海道(?)の帯方郡に至り、そこで中国本土と連絡を取ってもらい、都洛陽に向かったと考えられる。もし狗邪韓国から陸路で行く場合は、釜山・金海周辺からおおざっぱではあるが、北西方向に向かって現在も使われているルートで北上したものと推測される。

もし陸路であれば特にそうであるが、海路でも途中でいろいろな場所に立ち寄らねばならなかったと推測され、その間に朝鮮半島南部地域にいた韓の人々と大いに交わり、いろいろな情報・モノなどを入手したものと推測される。次章で扱う弥生時代終末期から古墳時代初め頃のいろいろな舶載品の中にはこのような国家間交渉の中で、また交渉の周辺でもたらされたものも比較的多く含まれているのではないであろうか。逆にこの行程の中でこの地域の人々に残された倭のモノもあったと推測される。朝鮮半島において出土しているこの時期の倭系遺物の一部はそれに該当するのではないであろうか。

つまり、邪馬台国時代の舶載品は、最初に見た『魏志』倭人伝の記録に見られるように、当然中国本土で作られたものもそれなりにあるであろうが、一方で朝鮮半島で作られたものも「中国製品」、「魏の品物」として扱っていた可能性はかなり高いのではないかと思う。当時の邪馬台国など倭の人々にとってそれらを区別する必要はないという考えもあるであろうが、より情報が入ってくれば来るほど、そのような違いを邪馬台国などの王たちは意識した可能性は高いのではないであろうか。

このように邪馬台国時代の倭と中国・朝鮮半島との交流は意識と実態、両面が交錯しながら動いていたのではないかと考えている。

3. 3、4世紀の日本列島と朝鮮半島・中国

(1) 朝鮮半島から日本列島へ

大和中枢部 3、4世紀の日本列島は弥生時代終末期から古墳時代前期にほぼ該当する。この時期は前述の邪馬台国などの国々が大王権を中心とする「国」へと発展し、その象徴的な存在である前方後円墳が各地へ広がっていく段階である。

中国との交渉は、前述の『魏志』倭人伝のあととはとぎれ、5世紀のいわゆる「倭の五王」の時代までよくわからず、空白の4世紀などともいわれている。また朝鮮半島との交流も後述するように4世紀末頃まではよくわからない。

この古墳時代に入ってから、近畿を中心とする大王、豪族たちは何を求めて中国・朝鮮半島と関わったのであろうか。この時期の古墳出土資料では朝鮮半島との関わりを示すものはよくわかっていない。当時の中枢部であったと考えられている奈良盆地南東部の纏向遺跡では、3、4世紀の瓦質土器や陶質土器、木製三角鏃が出土している。また箸墓古墳の周濠から4世紀代の木製鐙が出土している（小山田 2004）。

また古墳出土品ではないが、『日本書紀』神功紀52（2運繰り下げ、372）年条に記された「七枝刀」は、奈良県石上神宮の「七支刀」と考えられており、これは百済王近肖古王・王子近仇首が倭王へ送ったものと考えられている。

河内・摂津 河内・摂津においてもあまり多くはないが、朝鮮系資料を少々見ることができる（小山田 2004）。加美遺跡の陶質土器壺、久宝寺遺跡の瓦質土器の炉形土器などを模倣した土器などである。また4世紀中葉頃と推測される摂津紫金山古墳の堅矧板革綴短甲、三又鍬なども朝鮮系考古資料である（上原ほか 2005）。

北部九州 北部九州では福岡市西新町遺跡がこの時期を代表する遺跡である（福岡市 1982～2001、福岡県 1985～2009、武末 1996など）（図2）。海岸部に面し、朝鮮半島南東部の釜山・金海地域から南西部の全羅道地域にかけての広い範囲の土器が出土し、当時の日本列島では使用されていなかったカマドやオンドル状遺構が住居に見られることから、これらの地域の人々がかなり渡って来ていたことがわかる。そしてこの朝鮮系資料のほかに山陰系（図2-1-11、2-2-4）や吉備系（図2-2-6）、畿内系（図2-1-10、2-2-3・5）の土器なども出土し、単に北部九州と朝鮮半島との交流拠点であったというだけでなく、西日本全域をカバーする交流拠点であったことがわかる。さらに朝鮮半島系のガラス玉作りの鋳型、山陰系の碧玉（緑色凝灰岩）製品作り、瀬戸内海系の塩作り（？）などに関わる遺物、イイダコ壺、網のおもりなども出土し、多様な仕事が行われていたことがわかる。

この西新町遺跡が栄えていた頃、山陰の島根県南講武草田遺跡や古志本郷遺跡などではちょうど釜山東萊貝塚に山陰系の土器が持ち込まれたのに対応するように、瓦質土器が持ち込まれている（亀田 2001）。

(2) 日本列島から朝鮮半島へ

有名な釜山東萊福泉洞古墳群の南約600mに位置する釜山東萊貝塚などにおいて庄内式～布留

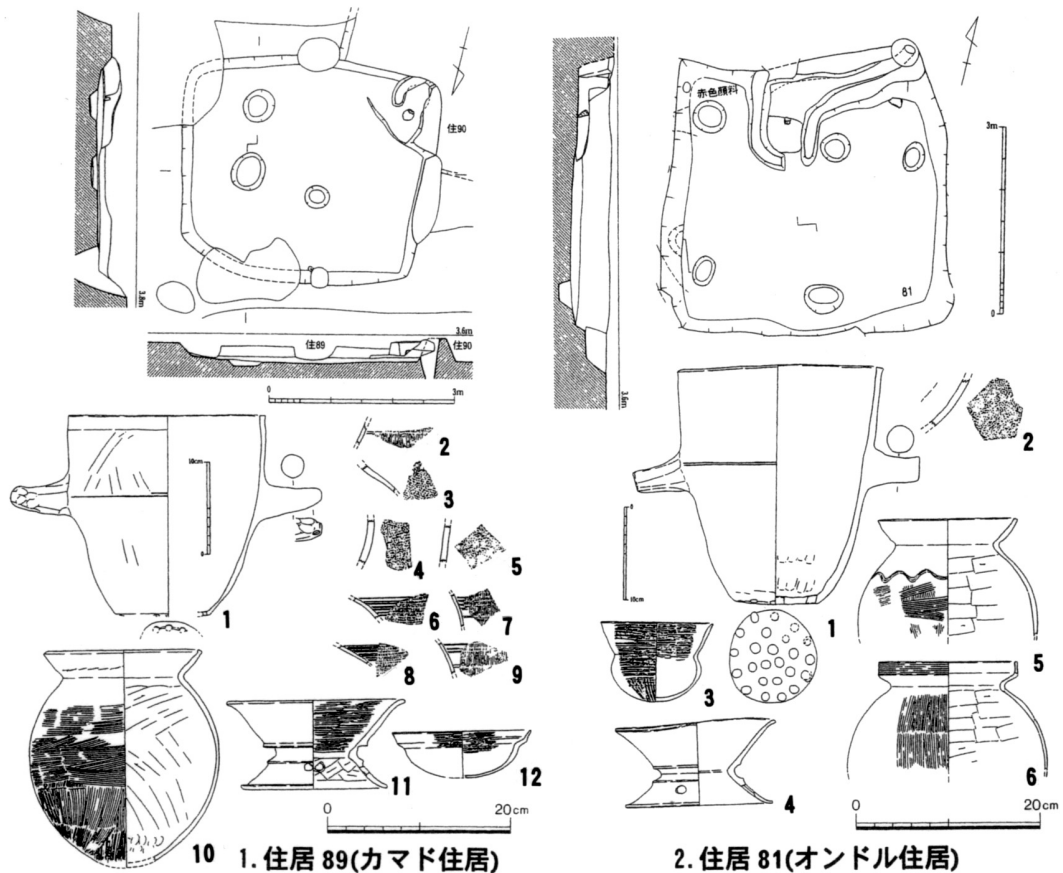


図2 筑前西新町遺跡の住居（1/120）と出土遺物（1/8）

式古段階（3世紀頃）の土器がみられる。九州系や山陰系のものがあるようである（釜山広域市立博物館福泉分館 1998）。当時はこの遺跡の比較的近くまで川を使って舟が入ってきていたと推測され、当然のことながら、海との関わりの中で倭・韓の人々が交流し、もたらされたものと考えられる。その後このような土器の搬入はしばらく見られない。

4世紀に入ると、碧玉（緑色凝灰岩）製品や巴形銅器、小型仿製鏡、銅鏃などが金海大成洞古墳群や昌原三東洞遺跡において見られるようになる（高久 2002、井上 2007、洪濬植 2010）。さらに新羅の中心地である慶州月城路古墳群においても碧玉（緑色凝灰岩）製石釧と土師器系土器が出土している。そして近年その所属がわからなくなってきた筒形銅器が金海大成洞古墳群や金海良洞里遺跡、釜山東萊福泉洞古墳群などから多数出土している（申敬澈 2004、田中 2009）。

この3世紀後半から4世紀代の倭系遺物はそれ以前の弥生時代の倭系遺物が基本的に北部九州地域のものであったのに対し、その範囲が山陰、さらに近畿地方まで広がったことを教えてくれている。そしてその近畿系の遺物のなかの碧玉（緑色凝灰岩）製品はやはり大和王権との関わりで理解すべきものであろう。

また、朝鮮半島における倭系遺物の分布範囲は基本的に洛東江下流域であり、一部慶州や全羅

道に見られるに過ぎない。当時の日本列島との関わりがこの洛東江下流域の人々を中心になされていたことが推測される。

(3) 3、4世紀の日本列島と中国・朝鮮半島

3、4世紀の日本列島と中国との交渉に関しては、邪馬台国以後、倭の五王の時代まで記録がない。313年に楽浪郡が高句麗によって滅ぼされ、倭と中国を仲介していた帯方郡も314年に滅ぼされ、西晋も316年に滅び、中国本土が五胡十六国の混乱期に入っている。このような状況のなかで大和王権は現実的に中国との関係を持てなかったのかもしれない。

日本列島と朝鮮半島との関わりでは、まず日本列島内で、大和王権と朝鮮半島との関わりを推測させる考古資料はあまり多くないが、七支刀などの資料から「国家」レベルの交流が続いていたことは推測される。また北部九州の西新町遺跡では多様な交流を示す遺構・遺物が出土しており、当時の日本列島側の交流拠点であったことがわかる。そのほか北部九州、山陰、近畿などでも数は多くはないが、朝鮮系資料が出土しており、在地豪族層や一般の人々の交流は継続していたものと推測される。

また、朝鮮半島南東部地域ではこの地域の王墓と考えられる金海大成洞古墳群などで碧玉（緑色凝灰岩）製品などの貴重品が出土している。「国家」間交流における、鉄素材など入手のための交換物・土産などであったのかもしれない。ただこれだけが鉄素材の交換物であったとは考えづらく、なにかほかのものも持って行っていたと思われる。米・塩、そして人かもしれない。

この3、4世紀には、次に述べる5世紀のような多数の渡来人による技術・情報・モノの伝達はなかったようである。

4. 5世紀の日本列島と朝鮮半島・中国

(1) 技術革新の世紀

5世紀は技術革新の世紀といわれている。やきもの（須恵器）、馬具・武器・武具などの戦争や権威に関わる道具、新しい鍛冶や金工の技術、農耕や土木工事に関わる道具などが伝えられ、日本列島の技術は大きく変化した。そして馬の飼育や新しい炊事施設であるカマドも伝えられ、日本列島の生活文化も大いに変化した。

このような変化は単にモノが入ってきたというレベルの話ではなく、技術を持った人の移動がなければ考えられないことである。それまでの交流も当然人が関わっていたのであるが、この5世紀の変革は大量の人々の移動を伴っていたと考えざるを得ない。いわゆる「渡来人」であり、まさに5世紀は「渡来人の世紀」と呼びうるのかもしれない。

その最も大きな要因は『広開土王碑』に記された高句麗の南下とそれに伴う朝鮮半島南部における混乱、そしてそれに関与した倭の動きであったと考えられる。この一連のできごとは、4世紀末から5世紀代のいろいろな考古資料に見ることができ、いわゆる倭の五王の中国への遣使もそのような流れの中でなされたものと考えられる。

(2) 朝鮮半島から日本列島へ

河内・大和 河内（和泉を含む）は日本列島第1位・第2位の前方後円墳である仁徳陵古墳・

応神陵古墳を含む百舌鳥・古市古墳群が築かれた地域である。これらの古墳群が築かれ始めた4世紀末頃は、いま述べたような朝鮮半島における混乱、それへの倭の王権・豪族たちの関与が始まった時期であり、そのなかで多くの朝鮮半島の人たちがこの河内の地へも渡ってきたと考えられている。

これらの古墳群の中で朝鮮半島との関わりを推測させる資料としては、応神陵古墳の陪塚と考えられている誉田丸山古墳出土の鮮卑・高句麗・新羅系鞍金具（5世紀前半）、墓山古墳の陪塚と考えられている野中古墳の伽耶系陶質土器、U字形鋤・鍬先、曲刃鎌（5世紀前半）、履中陵古墳の陪塚と考えられている七観古墳出土の新羅・伽耶系（？）の帯金具、輪鐙（5世紀前半）などが代表的である（千賀・村上 2003）

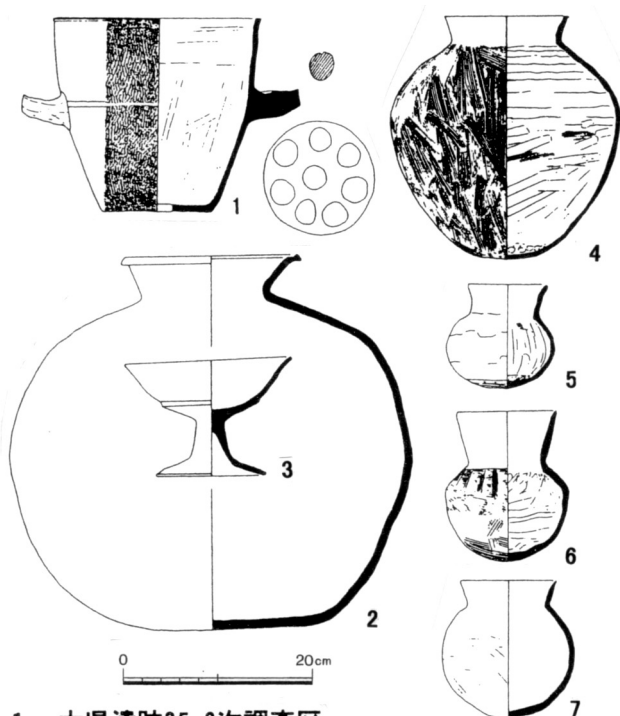
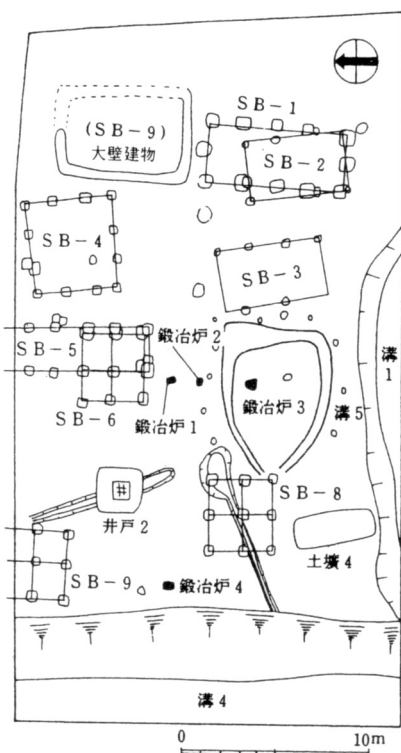
生産遺跡として代表的な例は、須恵器生産の陶邑窯跡群と鉄器生産の大泉遺跡群がある。陶邑窯跡群は5世紀初め頃に操業を開始した須恵器の窯跡群であり、初期段階には朝鮮半島南部の伽耶・全羅道地域にその系譜が求められる須恵器が生産されている。大泉遺跡群も5世紀前半から操業を開始したようで、全羅道系の甗などが出土している（上林 2004）。

また馬飼いに関わる遺跡として河内湖北東岸の部屋北遺跡などがある。ここでも全羅道系の土器などが出土しており、朝鮮半島から渡ってきた渡来人たちがこの地域で馬を飼い、王権に献上していたものと推測される（上林 2004）。

大和では南郷遺跡群周辺が注目される（奈良県立橿原考古学研究所 1996～2003、木下 2006）。豪族祭祀に関わると考えられている極楽寺ヒビキ遺跡が台地上にあり、その麓に鉄製品、銀製品、ガラス製品などを作っていた工房群と大壁建物などが広がっている。大和王権を支えた大豪族である葛城氏のもと、新しい技術で最先端のモノを作っていた渡来工人たちの姿が推測できる。そして新羅から「俘人」（桑原・佐藤・高宮・忍海の四邑の漢人の祖）を連れて帰ってきたといわれている葛城襲津彦の墓と推測されている室宮山古墳（墳長238mの前方後円墳）で船形陶質土器が出土している。また約5km南の五条猫塚古墳では最新の眉庇付冑とともに鍛冶具がセットで出土している。そのほか新沢千塚古墳群でもこの時期の朝鮮半島、さらにその北方などにつながる考古資料がまとまって出土している。

以上の例は基本的に5世紀前半代のもので、5世紀後半になると渡来人たちの存在は考古学的には確認が難しくなってくる。その中であって朝鮮半島との関わりが比較的推測できる古墳として、前述の鉄器生産に関わる大泉遺跡群のすぐ南東側に位置する高井田山古墳が注目される（安村・桑野 1996）。直径約22mの円墳で、近畿地方では初期の段階の横穴式石室を内部主体とし、釘・鋌使用の木棺を2基並置し、副葬品として極めて貴重な火熨斗、金層ガラス玉など朝鮮系のものを納めている。このような古墳自体のあり方から百濟系の王族クラスの渡来人の墓ではないかと考えられている。

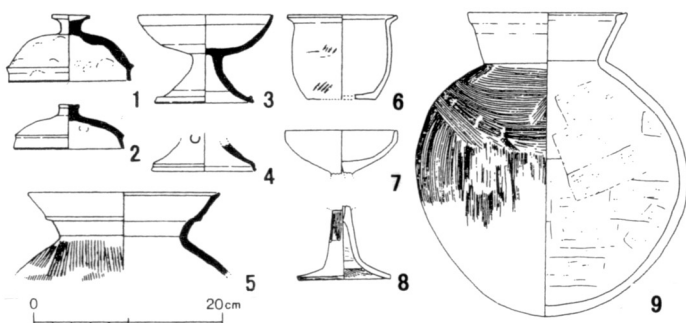
吉備 吉備では造山古墳周辺が注目される。造山古墳自体は発掘調査されていないが、5世紀初め頃の墳長360mの前方後円墳である。この周辺には馬形帯鉤、鍛冶具、陶質土器を出土した榊山古墳、吉備最古段階のカマド住居で鉄鋌や鍛冶滓、釜山福泉洞古墳群出土のものと類似した鉄鋌などを出土する鉄器工房と考えられている窪木薬師遺跡、多数の初期カマド住居があり、軟質土器や吉備産初期須恵器などを出土する渡来人たちのムラと考えられる高塚遺跡などがある。



1. 大泉遺跡85-2次調査区
遺構位置図(1/400)および土坑4出土遺物(1/8)

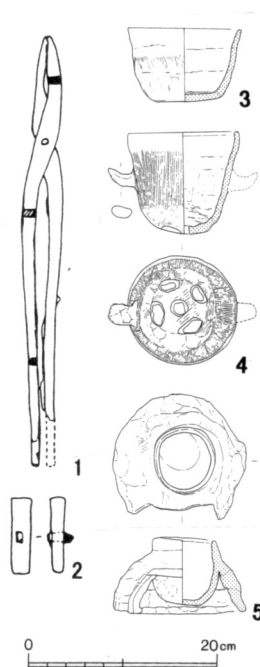


南郷角田遺跡SX09出土遺物(1/4)



2. 南郷遺跡群

下茶屋カマ田遺跡竪穴住居SB10(1/8)



3. 巨勢山古墳群

1、2:巨勢山 436 号墳

3~5:巨勢山 408 号墳(1/8)

図3 畿内の朝鮮半島関係遺跡の遺構と遺物

これらの資料から造山古墳の被葬者―榊山古墳の被葬者―窪木葉師遺跡や高塚遺跡で鉄器作りなどの仕事・生活をしている洛東江下流域からの渡来人たちという5世紀前半頃の姿が推測できそうである。

このほか奥ヶ谷窯跡の初期須恵器生産も含め、5世紀前半の朝鮮半島からのいろいろなモノ・技術・文化はおもに伽耶地域から入ってきたようである。ただその中にあってこれらの遺跡群から南西に少し離れたところに位置する菅生小学校裏山遺跡では伽耶系以外にも新羅系、全羅道系、百済系など多様な朝鮮系考古資料が見られる。この菅生小学校裏山遺跡は当時の地形を復元すると海岸線に面することが推測され、当時の港に関わる遺跡であったことが推測される。つまりこのような多様性は当時の瀬戸内海交通にいろいろな地域の朝鮮半島の人々が関わっていたことを教えてくれるとともに、吉備の豪族たちがそのような海上交通に関わっていたことを教えてくれていると思われる（亀田 2004）。

(3) 日本列島から朝鮮半島へ

5世紀の朝鮮半島における倭系遺物の分布は、5世紀前半までは3、4世紀代の傾向と基本的に同じで、朝鮮半島南東部の伽耶地域の海岸部に多いのであるが、5世紀後半頃からはその地域を含めて、さらに高霊・陝川などの大伽耶地域など内陸部へ入っていくとともに、西の全羅道からさらに北の百済中枢部へ入っていくようである（洪濬植 2010）。時期的には前述の高井田山古墳や九州の江田船山古墳や番塚古墳などと重なる。

そして日本列島のどの地域が関与したのかはわからないが、全羅北道竹幕洞遺跡（おもに4世紀中葉～6世紀前半）では多くの滑石製模造品が出土し、5世紀後半～6世紀前半の須恵器も出土している。5世紀代の須恵器は忠清北道新鳳洞古墳群、全羅北道伏岩里古墳群、慶尚南道鳳溪里古墳群などでも出土している（酒井 1993、木下 2003など）。

(4) 倭の五王時代の対中国交渉

空白の4世紀のあと、再び倭が中国の正史に見られるようになるのが413（義熙9）年の東晋への朝貢記事である。それから502（天監元）年の記事まで13回記録されている。これらすべてが朝貢・遣使ではないが、少なくとも大和王朝は中国に対して5世紀には積極的に使いを派遣し、再び中国の力を背景として、日本列島内だけでなく、朝鮮半島においてもその勢力を伸ばそうとしていたようである。

その代表的なものが478（昇明2）年の「倭王武上表文」である。武はそ中で東の毛人を55国、西の衆夷を66国、さらに海を渡って95国を征服したとして、「使持節・都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事・安東大將軍倭国王」と自称して上表し、宋の順帝は百済を外してほかは認めた。そのような意味でこれらの朝貢・遣使は邪馬台国時代の目的と共通する。ただ高級品などのモノに関してはどのようなものを求めたのかよくわからない。また倭が中国へ献上したモノも、「方物」とあるだけでその内容はわからない。

(5) 5世紀の日本列島と朝鮮半島・中国

以上のように、5世紀代の日本列島と朝鮮半島の交流は前半と後半で区別ができるようで、考古学で確認できる大きな波は前半にあるようである。一方、朝鮮半島における倭系遺物は、前半は伽耶地域では洛東江下流域の金官伽耶（金海地域）、そして後半になるとやや内陸部の大伽耶

(高霊地域)へ、そして、朝鮮半島全体では、伽耶西部地域から全羅道地域により深く及んでいくとともに、忠清道を含めた百済地域との関わりがより見えてくる(朴天秀 2007)。

また交流のレベルも、国家同士、地方の豪族と国家、豪族同士、一般庶民の関係など多様で、のちに見られるような国家が対外交渉をほぼ独占するような状況はこの5世紀代にはまだ見ることができない。

この時期、大和王権が中国に求めたものは前述のようにおもに権威であり、具体的な技術・モノ・情報・知識などはおもに朝鮮半島からの渡来人たちに期待したようである。この渡来人たちは大和王権中枢部の近畿地方だけでなく、吉備や北部九州にもかなり定着していたようで、各地で彼らの生活の痕跡や墓などを見ることができる。この5世紀の渡来人たちの移住は6、7世紀の渡来人受け入れの基礎を築いていったものと推測される。

5. 6世紀の日本列島と朝鮮半島・中国

(1) 朝鮮半島から日本列島へ

河内・大和 6世紀になると、朝鮮系考古資料は5世紀代に比べてかなり少なくなり、渡来人の存在は確認しづらくなる。それは5世紀代の朝鮮半島と日本列島の生活にはかなりの違いがあり、いろいろなものを持ってくる、そして壊れれば、朝鮮半島で使用していたものと同様のものを作ることで、日本列島のものとの違いが区別できた。しかし、6世紀になると、例えばカマドや甑を使った調理方法などは日本列島の人々に多く受け入れられ、朝鮮半島からの移住者(渡来人)たちはあえていろいろな道具類(例えば鍋釜など)を持って来なくてもすむようになり、また移住先で朝鮮半島で使用したものと同じものを作らなくても、日本列島産のもので用が足りるようになったからと考えられる。

その中であってミニチュア炊飯具や釵子は6世紀代の日本列島の人々には受け入れられなかったようで、それらを副葬した古墳は中国系渡来人の墓と考えられ(水野 1969、関川 1988)、渡来人さがしに利用されている。

河内・大和、そして近江地域では、ミニチュア炊飯具や釵子を副葬した古墳が見られる。河内では前述の大泉遺跡群の東の山に位置する大泉古墳群などで出土している(図4)。また鍛冶生産が続けられていた大泉遺跡群で6世紀後半の平底深鉢形土器が出土しており、この時期の珍しい資料となっている。

大和においても、前述の南郷遺跡群の東側に位置する巨勢山古墳群のなかの6世紀前半の巨勢山408号墳においてミニチュア炊飯具が副葬され(図3-3-3~5)、5世紀代の朝鮮半島との関わりが続いていたことがわかる。

モノとして朝鮮半島との関わりを推測させるものに装身具や金銅製の馬具などの金工品がある。明確な系譜は把握しづらいが、馬具は5世紀前半~中葉は百済・金官伽耶系のものが多く、5世紀後半~6世紀前半には大伽耶系・百済系が主流を占め、6世紀中葉頃から新羅系のものが増えてくるとされている(千賀・村上 2003)。また垂飾付耳飾は、5世紀~6世紀前半代は大伽耶系が多く、一部百済系や新羅系見られるようである(高田 1998)。



図4 河内大県10-1号墳ミニチュア炊飯具（左）と銀製釵子・指輪（右）（縮尺不統一）

そして6世紀後半の有力首長層の副葬品の実体を教えてくれた大和藤ノ木古墳の多様な金工品は国産の可能性が推測される一方、大伽耶系の工人を吸収した新羅系工房の関与が推測されている（千賀・村上 2003）。

吉備 吉備においても6世紀代の朝鮮系考古資料は少なくなる。その中にあって注目されるものが備中窪木遺跡の6世紀代の堅穴住居から出土した三又鍬、窪木遺跡の西約1.2kmの福井大塚12号墳（6世紀後半）で出土した須恵器の有溝把手付鍋、備前門前池東方遺跡のオンドル住居（6世紀後半）、八幡大塚2号墳（6世紀後半）出土の百済系金製垂飾付耳飾などである（亀田 1997）。

これらの資料はこの時期のほかの地域を含めて珍しいもので、吉備が朝鮮半島と関係を継続して持っていたことが推測される。ただ、これらの資料が吉備と朝鮮半島との直接的な関わりの中で入ってきたのか、5世紀中葉の雄略天皇による吉備制圧をへて、畿内経由、または畿内との関わりの中で入ってきたのかは意識しておく必要があるようである。

例えば、三又鍬を出土した窪木遺跡の南東約500mには、白猪屯倉に関わると推測される窪木薬師遺跡があり、八幡大塚2号墳は児島屯倉が推定されている児島の北岸に位置している。

また、この時期の備中と朝鮮半島との関わりを推測させる史料として、「備中国大税負死亡人帳」（739年）がある。8世紀の史料ではあるが、その中に賀夜郡庭瀬郷三宅里の忍海漢部真麻呂など畿内の渡来系の人々の名前が記されており、白猪屯倉・児島屯倉の設置に伴って畿内から新たな渡来人たちが移住させられたことが推測できる。その仕事としては鉄生産・鉄器生産などが推測できる（直木1983・亀田2000）。

備前と朝鮮半島との関わりに関しては、『日本書紀』に記された吉備海部直一族の一連の記事が参考になる。特に敏達天皇12（583）年、吉備海部直羽島が日羅を百済にまで迎えに行き、帰りに児島屯倉に立ち寄っていることなどは、前述の八幡大塚2号墳の百済系垂飾付耳飾の存在との関わりを推測させ、興味深い。

九州 6世紀代の日本列島と朝鮮半島の関係は畿内、吉備においても考古学の面からは検討しづらい。九州も基本的には同様であるが、多少その関係を検討できるものがあるので挙げておく。

肥後江田船山古墳（墳長62mの前方後円墳、横口式家形石棺）では、有名な銀象嵌大刀のほか、金製垂飾付耳飾、金銅製の冠帽・冠・飾履・帶金具、百済系陶質土器蓋杯、多角形袋部鉄矛など多種多様な朝鮮系資料が出土している（菊水町史編纂委員会 2007）。これらの遺物は5世紀後半～6世紀前半のもので、2、3回の埋葬に伴うものと考えられている。系譜としては大伽耶系のものと百済系のものに分けられ、この被葬者たちが朝鮮半島の広い範囲に関わっていたであろうことと、ちょうどこの時期の朝鮮半島における勢力変遷に関わっていたであろうことが推測できる。

江田船山古墳の被葬者を含め、当時の有明海沿岸地域の豪族たちは積極的に近畿の大和王権や朝鮮半島に関わっていたようである。このようなあり方は時期的に少し下がるが、火葦北国造刑部鞆部阿利斯登の子の日羅が百済の達率になっているという『日本書紀』敏達天皇12（583）年条の記録とも重なる。

またこれも6世紀前半の話であるが、有名な磐井の乱（527年）の原因として、筑紫国造の磐井が大和王権が攻めようとした新羅と親しくしていたことがあげられている。この5、6世紀頃の九州の豪族たちは大和王権との関わりは持ちながらも、独自の朝鮮半島とのパイプも持ち、活発な交流をしていたものと推測される。

このように6世紀代は、考古資料においては日本列島と朝鮮半島の関わりをとらえづらいが、資料を注意深く検討することで当時の交流の一面を知ることができるようである。

(2) 日本列島から朝鮮半島へ

古代日韓関係の大きなテーマとなっている全羅道地域の前方後円形古墳が築かれるのが5世紀末～6世紀前半である（朝鮮学会 2002）。古墳の形、内部主体の石室構造、埴輪との関わりが述べられている円筒形土器など多くのものが倭との関係を物語っている。そして最近の研究ではこれらの系譜が畿内中核部ではなく、北部九州の古墳との関わりで理解できるのではないかと考えられつつあるようである（柳沢 2006）。また前方後円形古墳ではないが、5世紀末～6世紀初めの海南造山古墳ではゴホウラ製の貝輪が出土しており、これも九州との関わりが推測されている。江田船山古墳（特に陶質土器の蓋杯はこの全羅道系）や豊前番塚古墳（鳥足文タキは全羅道、忠清道に多い。）などの副葬品はこのころの関係を象徴しているようである（岡村・重藤 1993）。

また6世紀前半の武寧王陵の棺には日本列島産の高野槨が使用され、その後扶余陵山里古墳群や益山双陵でも高野槨が使用されている。これらには大和王権が関与した可能性が高い。

一方、慶尚南道地域でも6世紀前半の須恵器（慶尚南道松鶴洞古墳群、生草9号墳など）や北部九州系の横穴式石室（慶尚南道雲谷里1号墳、景山里1号墳など）（趙榮済 2004）が見られ、これらの地域と北部九州の関係が継続していたことがわかる。

(3) 記録に見られる大和王権と朝鮮半島・中国

大和王権と朝鮮半島の関わりを示す史料は、当然地方に比べれば多いが、その中にあって、注目したいのが百済からの五経博士の渡来記事である。

『日本書紀』の継体天皇7（513）年6月条の段楊爾、同10（516）年9月条の漢高安茂、欽明

天皇15（554）年2月条の王柳貴などの記事である。これらの記事は中国系の人々が五経博士として日本列島に渡来し、しばらく滞在し、そして帰国していることを記したものである。これらの記事によって日本列島に渡って来た中国系百済人（?）、または中国の人々の存在を知ることができ、また来て帰っていったことを知ることができることは重要である。

これまで述べてきた考古学において推測することができる渡来人のほとんどは朝鮮半島の人々と考えているが、一方でミニチュア炊飯具によって中国系の人々が渡って来たことが推測されている。上記の記事はその一部を教えてくれている可能性がある。

また筆者は朝鮮半島から日本列島へ渡って来た人々の多くは定住したと考えているが、一方でしばらく滞在したのちに帰っていった人々がいたことも当然考えている。いま述べた五経博士の記事はそれを教えてくれている。ほかにも外交使節の記事は短期滞在を示すもので、考古資料だけでは当然わからないことをこのような文字史料は語ってくれており、これらを総合化することでより具体的な当時の人々の交流に迫ることができると考えている。

6. 7世紀の日本列島と朝鮮半島・中国

仏教 7世紀になると、中国との直接交渉が遣隋使や遣唐使などによって改めて確認できる。7世紀の日本列島への新しい技術・文化などの伝播を示すものの代表例が仏教・寺院に関わるものである。仏教は欽明天皇戊午（538）年に百済の聖明王から伝えられたが、そのまますぐには受け入れられず、蘇我氏・物部氏の崇仏排仏の争いに発展し、最終的に蘇我氏の勝利、そして崇峻天皇元（588）年の飛鳥寺の建立へ至る。

この飛鳥寺造営には百済の威徳王から仏舍利・僧とともに寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工などが派遣され、新しい技術が人を通して伝えられたことが『日本書紀』崇峻天皇元（588）年条に記されている。この記事に関しては、当時の日本列島には見られなかった本格的な寺院が建立されていることや瓦が使用されていることなどで確認できるのであるが、瓦については、その文様だけでなく、技術面においても百済とつながることが証明されている（亀田 2006）（図5）。

このような新しい仏教に関わる技術・情報・文化はその後飛鳥地域、畿内、さらに周辺の地方へ伝えられていくが、その広がりはずべてが朝鮮半島→日本列島の中央→地方という流れではなく、直接朝鮮半島→日本列島の地方という流れも瓦などによって確認できる。その系譜に関しても、百済系だけでなく、高句麗新羅系、古新羅系、統一新羅系などの瓦のほか、百済・新羅の国境地域に見られるスダレ（簾）状模骨瓦など多様な瓦があり、当時の百済王権と大和王権という国家レベルの交流だけでなく、地方・地方間の交流、豪族レベル、民間レベルなど幅広い交流があったことがわかる（亀田 2006）。

そして不確実な部分もあるが、7世紀中葉の川原寺の創建時には複弁蓮華文軒丸瓦という新たな瓦の文様が受け入れられ（図5-3）、そして中国系と考えてほぼ間違いのない埴仏がこの頃から使用されるようになる。川原寺に見られる埴仏の文様はよく似たものが唐の都長安で出土しており、大和阿弥陀山寺出土の火頭形埴仏は同文のもの（「大唐善業」銘埴仏）が長安で出土している（大脇 1990）（図6）。また、7世紀末創建の大官大寺の軒丸瓦も唐太宗陵のものと類似し

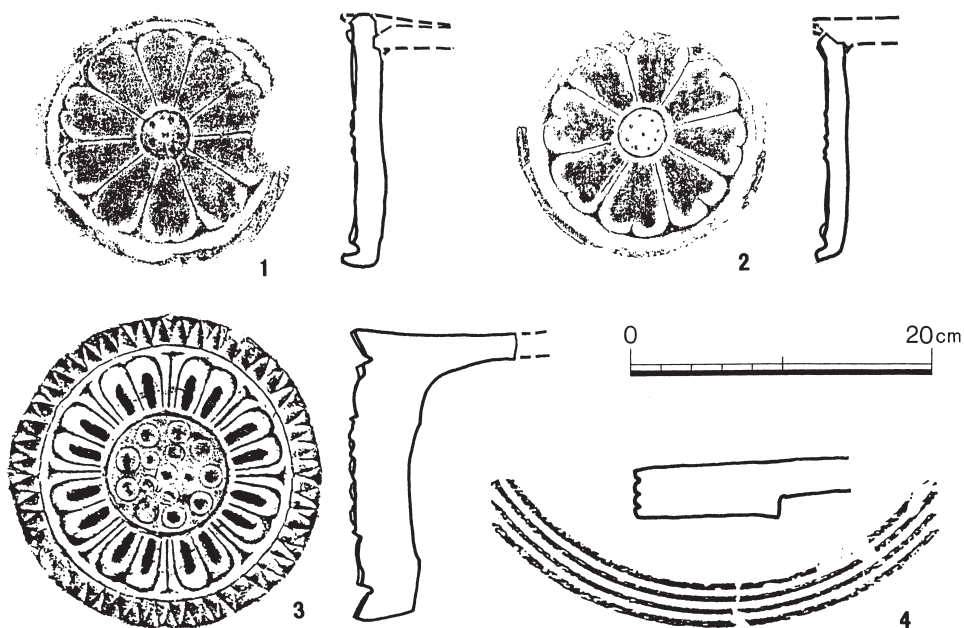


図5 大和飛鳥寺・川原寺の瓦と関連資料（1/5）
1：飛鳥寺、2：百済双北里遺跡、3・4：川原寺



図6 中国と日本の埴仏（左：長安：高さ14.4cm、右：奈良県阿弥陀山寺：高さ15.9cm）

ており、少ないながら唐→日本列島という流れが考古学資料においても確認できるようになる。

ただ、中国大陆から日本列島への情報・文化などの伝播は、遣隋使・遣唐使を除けば直接的なものは極めて少なく、やはりこれまで同様基本的には朝鮮半島経由であることは間違いないようである。特に技術伝播は中国からどの程度伝えられたのか、意識しておく必要があろう。

仏教関係以外 仏教関係以外でも、飛鳥の花崗岩を使用した石造物、その加工技術は、益山弥勒寺跡の石造物との類似などから百済の花崗岩加工技術によると推測される。これに関しては『日本書紀』推古天皇20（612）年条の百済から渡ってきた芝耆麻呂（路子工）が須弥山の形や呉橋などを造ったという記事と関連する可能性がある（斎藤 1976、猪熊 1983）。

また大和平野塚山古墳の石室構造は扶余陵山里東下古墳の石室構造とよく似ており、百済からの王族を含む高貴な人物の墓と推測されている。

そして日本列島の火葬は文武天皇4（700）年の道昭に始まる。道昭の骨蔵器についてはわかっていないが、それ以降の火葬骨を納めた骨蔵器の形は百済の土器に類例があり、その影響下に使用された可能性がある（藤澤 1970、斎藤 1978）。

ただ、天皇として初めて火葬された持統天皇の骨蔵器は金銅製・銀製で鎖で括られていたことが知られている（秋山 1979）。単にその容器がそのようなものであったのか、それともその容器のあり方が系譜を示しているのか気になる。なぜならば新羅の骨蔵器は鉄などで緊縛したものがあり、そのあり方と類似しているように思われるからである（網干 1979）。

また、西日本に限定されるが、朝鮮式山城・神籠石系山城が660年の百済滅亡、663年の白村江の戦い（敗戦）を契機として九州から近畿地方にかけて築かれる。その築造には百済の亡命貴族が関与したことが記されており、基本的に百済系であることがわかる。

この朝鮮半島における三国統一の過程の混乱を避けて、日本列島に多くの人々が渡ってきたことは『日本書紀』などに見ることができる。彼らの中には滅亡した百済だけでなく、新羅の人々も含まれている。そして彼らはおもに東国に安置される。東国への新しい渡来人の移住である。

以上のように、7世紀の飛鳥文化は基本的に百済との関わりで理解される。これまでの日本列島と朝鮮半島・中国との交流のあり方と同じように、主たる交流の柱はあるようである。ただ、百済だけでなく、新羅や高句麗との関わりもある。遣隋使や遣唐使などを通した中国との新たな交流もある。このように7世紀も単純な交流ではなく、階層・地域・系譜など、多様な、そして複雑な交流があったことがわかる。

7. 古墳時代の日本列島と朝鮮半島・中国の交流

以上、述べてきたことを整理すると、古墳時代の日本列島と朝鮮半島・中国の交流は大きく4期に区分できそうである。

まず、第Ⅰ期（3世紀～4世紀末）、倭は中国に権威と高級な品物を求め、朝鮮半島には鉄素材などいろいろ現実的なものを求めたようである。朝鮮半島ではおもに南部の伽耶地域との交流が深く、その交流においてそれ以前の弥生時代はおもに北部九州が倭を代表していたようであるが、邪馬台国時代頃からは近畿地方が表舞台に出てくるようである。

その後倭の大王・豪族たちは、楽浪郡・帯方郡の滅亡、そして西晋の滅亡、五胡十六国の混乱のなかで、中国との交渉が難しくなり、より現実的に朝鮮半島と対応するようになったものと推測される。

そして第Ⅱ期（4世紀末～5世紀末）、4世紀末～5世紀初になると、朝鮮半島南部地域に高句麗が南下し混乱が起こり、倭の王権中枢部や地方の豪族たちはその混乱に積極的に関与、または関与せざるを得なくなり、その結果として、倭へは多くの伽耶南部地域の人々が移住することになる。いわゆる「渡来人」である。彼らの技術・知識・情報・モノなどは王権中枢部の大豪族たちには積極的に受け入れられ、吉備をはじめとする西日本各地の豪族たちにもかなり積極的に受け入れられたようである。

このような状況は5世紀中頃まで続くが、この朝鮮半島南部地域における混乱のなかで倭のおもな交渉相手が大伽耶や百済となり、5世紀後半以降は大伽耶・百済系の資料が日本列島に多く見られるようになる。ただ一方で、北部九州や有明海沿岸地域の豪族たちはその流れに乗りながらも独自のパイプは維持したようで、6世紀前半の朝鮮半島南部の、おもに中・西部地域には須恵器や北部九州系の横穴式石室が見られ、これらの地域と北部九州の関係が継続していたことがわかる。

一方、5世紀初め頃には中国への朝貢・遣使が再開し、中国の権威への期待はいま述べた朝鮮半島における倭の動き、倭国内での政治的なあり方にも影響を与えたようである。『宋書』に記された有名な「倭王武上表文」を送った雄略大王は葛城氏を押さえ込むなど王権内部をまとめ直し、さらに地方豪族の雄であった吉備をも押さえ込み、倭国を新たな段階に押し上げるのである。

そして第Ⅲ期（6世紀初～6世紀末）、日本列島では5世紀に活躍した渡来人たちの痕跡は考古資料としてはとらえにくくなり、532年の金官伽耶の滅亡、562年の大伽耶の滅亡によって起こったと推測されるあらたな移住の波も明確にはとらえることはできない。この大伽耶滅亡を契機として倭は百済とより深く関係をもつようになる。そしてこの時期の朝鮮半島との関わりを示すものがミニチュア炊飯具副葬儀礼である。中国系百済人の可能性も推測され、朝鮮半島における動きとも対応している可能性がある。

第Ⅳ期（6世紀末～710年）、古墳時代終末期、前方後円墳から方墳・八角形墳へ、仏教文化、遣隋使・遣唐使による中国との直接交渉などがこの時期、飛鳥時代を象徴している。この飛鳥時代を代表する飛鳥寺は、大和王権中枢部に位置する蘇我氏が百済ラインの中で造営したものであり、百済滅亡を契機に築かれた古代山城も基本的に百済系である。

しかし一方で、百済・倭と敵対関係と理解されている新羅系の考古資料が少ないながら各地で見られることも重要である。つまり国家レベルの交流と違った民衆レベルの交流は百済・新羅を問わずなされていたことを教えてくれているようである（高田 2004）。5、6世紀の古新羅土器や7世紀頃の印花文土器などの新羅土器が北部九州や山口県・島根県地域などでみられることはこのような実態を教えてくれている（亀田 2008など）。さらに近畿地方の7世紀中葉前後の瓦の中に古新羅系の瓦が見られることは、畿内においてもそのような王権中枢部とは別の動きが存在したことを教えてくれている。

一方、7世紀初めからは中国と遣隋使・遣唐使を通して、直接交渉するようになる。しかし、

その交渉の結果が、考古資料として見られるものは極めて少ない。国家レベルの交流であり、中国から下賜された貴重品は王権内部に納められ、また大豪族たちのもとに納められたものと推測される。使いの人々が自ら持ち帰ったものも基本的に王権周辺に納められたものと推測される。

7世紀の中国系資料として挙げうると考えている川原寺などで使用された埴仏のモデルは、650年頃の遣唐使がもたらした可能性が推測されている（大脇 1990）。

このように7世紀になると中国から直接伝えられるものが徐々に増えてくると考えられるが、やはり国家レベルから民間レベルの交流の基本は朝鮮半島とであり、人を介して多くのモノが往き来したものと考えられる。特に技術伝播は朝鮮半島から人を介してなされたものと考えられる。

8. おわりに

古墳時代の日本列島と朝鮮半島との交流は、第Ⅰ期はおもな対象地域が伽耶であり、前半の3世紀頃には小さな波があり、後半の4世紀にはそれがやや停滞する。そして4世紀末からの第Ⅱ期にはその波が古墳時代最大となり、渡来人を通して日本列島の技術・生活・文化に大きな影響を与える。ただ考古学的にはその前半である5世紀前半の波が大きく、後半にはやや下り坂になるようである。第Ⅲ期の6世紀は大伽耶の滅亡との関わりを含めて実際にはそれなりの波があったのであろうが、考古学的には把握しづらくなる。そして6世紀末からの第Ⅳ期は百済からもたらされた新たな仏教文化を基調としながら、中国との直接交渉が再開し、新羅なども交えた多様な飛鳥文化が展開し、律令国家へ向かっていく。

以上述べてきたことを朝鮮半島と中国との関わり方に注目して整理してみると、朝鮮半島との交流は多くの「人」を介し、意識・モノ・技術・情報などを含めて国家間、各地の豪族たち、そして民間レベルなど、地域的にも階層的にも多様であり、大きな波であった。そのような多様な交流が日本列島各地に新たな個性・地域性をもたらしたと思われる。

一方、中国との交流は基本的に国家レベルの交流であり、モノや部分的な情報はもたらされたと推測されるが、技術などは難しかったものと推測される。

中国には権威と高級品を、そして朝鮮半島には「人」を介した技術、実際の必需品などを求めたものと推測される。

このような状況が変化するのが7世紀である。遣隋使・遣唐使を介した中国との直接交流によって、中国の思想や文物が受け入れられるようになる。理念などに関しては国家に大きな影響を与えたと考えられる。しかし、一般庶民に中国系文物が届くことはほとんどなかったようで、それは日宋貿易が盛んになる平安時代末期、中世まで待たなければならなかったようである。

小稿をなすにあたり、次の方々にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。なお、失礼ながら敬称を省略させていただいた（五十音順）。

諫早直人、内山敏行、小田裕樹、高田貫太、土生田純之

〔参考文献〕

- 秋山日出雄 1979「檜隈大内陵の石室構造」橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集第5 創立40周年記念』吉川弘文館
- 網干善教 1979「日本上代の火葬に関する二、三の問題」『史泉』53
- 井上主税 2007「倭系遺物からみた金官加耶勢力の動向」『九州考古学』82、九州考古学会
- 猪熊兼勝 1983「飛鳥猿石考」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編『文化財論叢』同朋舎出版
- 上原真人ほか 2005『紫金山古墳の研究』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科
- 大脇潔 1990「埴仏とその製作年代」倉吉博物館編『特別展埴仏』
- 岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 岡村秀典・重藤輝行編 1993『番塚古墳』九州大学文学部考古学研究室
- 小山田宏一編 2004『平成16年秋季特別展 大和王権と渡来人—3・4世紀の倭人社会—』大阪府立弥生文化博物館
- 上林史郎編 2004『平成16年秋季特別展 今来才伎—古墳・飛鳥の渡来人—』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）、九州古文化研究会
- 亀田修一 1997「考古学から見た吉備の渡来人」武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社
- 亀田修一 2000「鉄と渡来人—古墳時代の吉備を対象として—」『福岡大学総合研究所報』240、福岡大学総合研究所
- 亀田修一 2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器」内田律雄編『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII』島根県教育委員会
- 亀田修一 2003「渡来人の考古学」『七隈史学』4、七隈史学会
- 亀田修一 2004「五世紀の吉備と朝鮮半島—造山古墳・作山古墳の周辺を中心に—」『吉備地方文化研究』14、就実大学吉備地方文化研究所
- 亀田修一 2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 亀田修一 2008「第五編 大王陵の造営 第八章 ものが語る朝鮮半島との交流」『山口県史 通史編 原始・考古』山口県
- 菊水町史編纂委員会 2007『菊水町史江田船山古墳編』
- 木下亘 2003「韓半島出土須恵器（系）土器に対して」『百済研究』37、忠南大学校百済研究所
- 木下亘編 2006『春季特別展 葛城氏の実像—葛城の首長とその集落—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 金在弘 1997「サルボと鉄鋤を通して見た4～6世紀の農業技術の変化」『科技考古研究』2、亞洲大学校博物館
- 金在弘 2007「錦江流域出土百済儀仗用サルボ」『考古探求』1、考古探求会
- 金鍾萬（寺岡洋訳）2009「日本出土の百済系土器」『朝鮮古代研究』9、朝鮮古代研究会
- 洪濟植（武末純一訳）2010「韓半島の倭系遺物とその背景—紀元後4～6世紀前半代を中心に—」『古文

化談叢』63、九州古文化研究会

斎藤忠 1976「奈良・吉備姫墓の墓域内にある『猿石』とその源流」『日本古代遺跡の研究 論考編』吉川弘文館

斎藤忠 1978「第7章 墳墓」『日本古代遺跡の研究 総説』吉川弘文館

佐伯有清 2000『魏志倭人伝を読む』上・下、吉川弘文館

酒井清治 1993「韓国出土の須恵器類似品」『古文化談叢』30（中）、九州古文化研究会

申敬澈 2004「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会

関川尚功 1988「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』9、吉川弘文館

高久健二 2002「韓国の倭系遺物—4～6世紀—」第5回歴博国際シンポジウム事務局編『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』国立歴史民俗博物館

高田貫太 1998「垂飾付耳飾をめぐる地域間交渉」『古文化談叢』41、九州古文化研究会

高田貫太 2004「5、6世紀日本列島と洛東江以東地域の地域間交渉」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集、考古学研究会

武末純一 1996「西新町遺跡の竈」『碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢』

田中晋作 2009『筒形銅器と政權交替』学生社

千賀久・村上恭通編 2003『『考古資料大観 7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館

趙榮濟 2004「西部慶南地域加耶古墳発見の倭系文物について」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会

朝鮮学会編 2002『前方後円墳と古代日朝関係』同成社

辻田淳一郎 2007『鏡と初期ヤマト政權』すいれん舎

直木孝次郎 1983「吉備の渡来人と豪族—5・6世紀を中心に—」藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店

奈良県立橿原考古学研究所 1996～2003『南郷遺跡群』Ⅰ～Ⅴ

福岡県教育委員会 1985～2009『西新町遺跡』Ⅰ～Ⅸ

福岡市教育委員会 1982～2001『西新町遺跡』1～7

福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会

釜山広域市立博物館福泉分館編 1998『釜山の三韓時代遺跡と遺物Ⅱ』

藤澤一夫 1970「火葬墳墓の流布」『新版考古学講座』6、雄山閣

朴天秀 2007『加耶と倭』講談社選書メチエ、講談社

水野正好 1969「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告』4

安村俊史・桑野一幸 1996『高井田山古墳』柏原市教育委員会

柳沢一男 2006「5～6世紀の韓半島西南部と九州」『加耶、洛東江から栄山江へ』第12回加耶史国際学術会議、金海市

[引用挿図]（いずれも一部改変引用）

図1：岡林孝作・水野敏典編 2008『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所

図2：重藤輝行編 2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会

図3-1、2、3-1、2：花田勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人』雄山閣 図3-3-3～5：木許守
2005『巨勢山古墳群Ⅴ』御所市教育委員会

図4：滋賀県立安土城考古博物館 2001『平成13年度春季特別展 韓国（からくに）より渡り来て』

図5-3、4：奈良国立文化財研究所 1960『川原寺』と奈良国立文化財研究所第54回公開講座会資料より合成

図6：左：後藤恒編 2008『掌のほとけ—インドシナ半島の埴仏』福岡市美術館、右：倉吉市博物館 1992『埴仏』